

なごやの
鎌倉古道

をさがす

【4】

中村から古渡へ…古代道路の跡

1 古代の東海道

古代の道路というと、くねくね曲った細い道を想像しがちです。ところが意外なことに、全国で掘り出される遺跡の結果から、古代を代表する道路(駅路)は広幅員でしかも何*もまっすぐだったと考えられています。残念ながらこの名古屋付近でそのような跡は発掘されていませんが、その可能性のある所が名古屋市内にもあるのです。

図1は、明治20年代の中村区から中川区にかけての図面です(文献①)。図中の左上に「東宿」とありますが、そこから右下の「露橋」にかけて点線(道路等)に沿って4つの▲印が打たれています。この印は古代交通研究会会長の木下良氏が打たれたもので、東宿から露橋に向かうこの細い道路が古代駅路の跡ではないかと指摘しています。

このルートは古代東海道が通ったとされる名古屋の西北の萱津と東南の両村(豊明市?)を結ぶ線上にあります。加えて古代道路研究の第一人者の指摘だけに大きな期待がもたれます。今回のテーマである中村から東南に向かう鎌倉街道も、実はこの古代道路を引き継いだ道ではないかと考えられるのです。

2 中村から露橋に

(1) 木下氏の論拠

木下氏の指摘は、この不自然なまっすぐの道に目をつけたことだけではありません。重要な点は、明治17年の地籍図を調べて、その下に古い道路が存在した可能性を発見したことにあります。

図2は、その線に沿った明治の初めの地籍図です。中央の線は字境いになりますが、よく見るとその線に沿って短冊状の土地がいくつかつながっているのが分かります。このような短冊状の土地の連続は古代道の遺跡の例から、ここも古い時代にあった道路跡ではないかとしています。幅は短冊の太さからおおよそ15mくらいと推定されており、これも全国の遺跡の規模と並ぶものです。

(2) 直線道路の確認

この直線の道は現在全く残っていません。しかしよく見ると横断している道路の中にW型をした特徴ある所があります。この形状は明治の地形図にも記されており、柳街道と考えられます。そこでその前後の位置を押さえることによってW型の地点を特定でき、その位置は黄金中学の校庭内と推定できるのです。

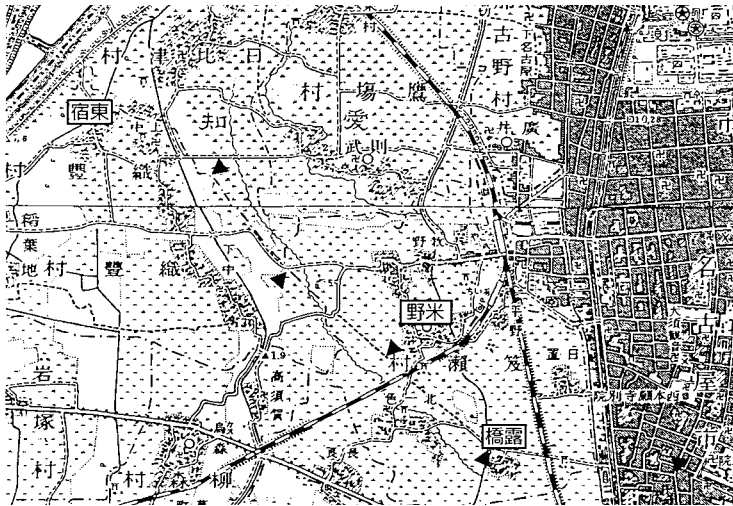


図1 名古屋市西北部の古代東海道跡の推定図(文献①、地図は明治24年)

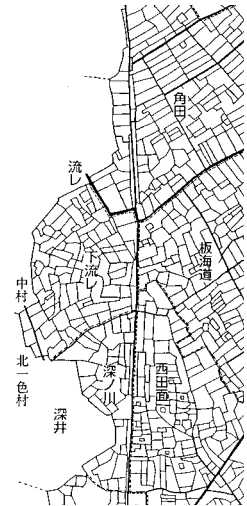


図2 古代東海道推定地の米野地籍図(文献①、明治17年)

この直線の道は文献や現地でもいくつかの裏付けができます。たとえば江戸後期の『尾張徇行記』では、中村より露橋村の方に古の小栗街道の跡があるとあります。また『尾張地名考』には稲葉地村から斜めに古渡村まで昔の鎌倉街道の跡畔のごとく残りとおって、江戸時代末にも道は残っていたと考えられます。

露橋の手前で、昭和初期に中川運河を建設した時、近くを通る鎌倉街道とされる道にちなみ「小栗橋」の名を残しました。街道は橋の少し北を通っていたとされ、これも先ほどの直線道路に符号します。この他に現地でも直線道の跡を見付けることができるのです。

(3) 露橋で曲って

直線の道の南側は露橋になり、そこで東に曲っています(木下氏は曲がり角ゆえにここに駅があったのではとも推測しています)。そして曲った後もまっすぐに東に向かっているのが分かります(図1、右下の▲)。その位置は明治の地図と対比すると現在の幹線道路(山王線)になり、堀川に向けてその中をほぼ平行に進んでいるのが分かります。

(4) 鎌倉街道のルート

中村公園の東にあった惣兵衛川の小栗橋跡から東南に向かう鎌倉街道は、明治の地図に残る直線の道が古代道路跡とすれば、中世の道もこの道であったと考えられます。また古代道路ではなかったとしても、おおよそこの

線に沿って露橋に向かっていたのではないのでしょうか。

また露橋から東に古渡に向かう道については、その傍に古い風情を残し鎌倉街道跡とされる旧道があります。しかしそれらは江戸時代の集落の中を通る道と考えられます。少々古代道路説に偏りすぎかもしれませんが、ここでは鎌倉街道は明治時代も直線で残っている現在の山王線の内を通っていたとしておきます。

3 鎌倉街道をさがす

それでは中村の東から古渡に向かって、鎌倉街道の跡を追って歩いてみましょう。地下鉄桜通線の終点、中村区役所駅の4番出口を出ます。幹線道路(黄金通)を南に進み、横断歩道橋の次の道を右に曲ります。この道は江戸時代には柳街道と呼ばれていた道です。1本目の角を左に曲ります。柳街道も左に曲りますが、旧道は少しずれて宅地内を通っています。南に進むと広い道に突き当たります。この道は千成通で、西に500m位の所が前回の街道探索で通った所になります。正面は黄金中学で、校庭は先ほど述べたW型の道の所です(図3、A)。入れないので左に回り東門から眺めることにします。南に校庭を過ぎた所で左に曲り、すぐの信号を渡ります。この先も斜めの街道跡は完全に消えています。

黄金通を南に、歩道橋の手前の道を東に進むと突き当たりの右側に金山神社があります。この南の一带は名古屋城築城の時の石切り場



▲黄金中学校庭。この中を古代東海道が通っていた？

石工たちにまつられた金山神社 ▶



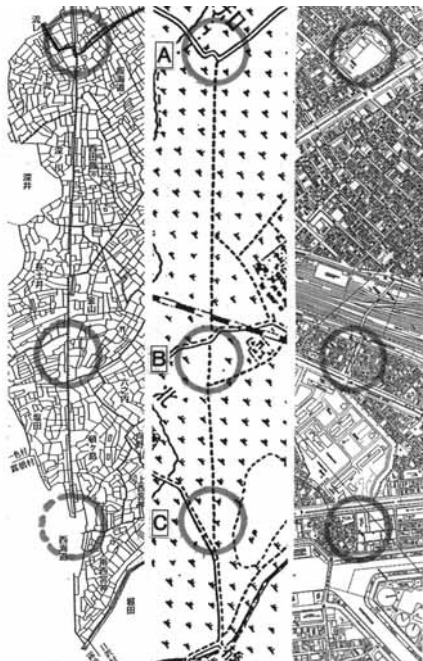
でした。中川運河の前身にあたる箕瀬川(中川)は露橋付近から下流は川幅が広く、築城の石が陸揚げされ、付近で加工されてさらに川を押切(西区)の辺りまで運ばれました。この神社はその石工たちがまつたもののだといわれます(元は少し南にありました)。

神社を東に行くとすぐ鉄道の線路になります。すぐの所に跨線橋の向野橋への階段があります。上ると左手に名古屋駅前の高層ビル群が手前の米野の古い家屋群と面白い対比を見せています。鉄道マニアに人気の操車場を越え、南の階段を下ります。橋の降り際が下の道に対し斜めになっています。道は元々階段の方向の細い道で、九重町の道と呼ばれた鎌倉街道跡でした(図3、B)。よく見ると手

前の道の角や向こうの幹線道路の左の隅切りが斜めに切られて街道の跡を伝えています。幹線道路の交差点の向こうは大きな豊成団地でここも街道跡は消えています。

昔の北一色村の集落跡を訪ねるため団地の西側に回ります。左に曲る所に草地がありますが、これは徳佐川の跡です。北一色は低い土地で洪水に悩まされ、地元の安井徳佐衛門という人が私財で排水路を整備した跡です。進むとすぐ左が神明社で、入口左に徳佐衛門の顕徳碑があります。その西を少し入ると善行寺の入口があります。この寺の鐘楼は名古屋城築城の残り石が使われており、いくつもの石に大名の刻印が確認できます。(文献③)

図3
○印は、**A**…露橋へ。(左は地籍図、中は地形図、右は現在)
○印は、**A**…黄金中学、**B**…九重の道、**C**…月島町の道



向野橋から見た名古屋駅の高層ビル。手前は米野



九重町の道。
正面の階段方向に旧道が通っていた



▲露橋の旧集落にある街並

◀善行寺の鐘楼。土台に大名の刻印のある築城石が埋めこまれている

寺の正面を出て左に進みます。しばらく行くと細い道になって、枯れた川の小さな橋を渡ります。先ほどの徳佐川の下流にあたります。進むと幹線道路に出ます。反対側に渡り延長上の道の1本北の道に入ります。この道は今は月島町になり、明治時代の直線道の線上にのる道なのです(図3、C)。道はすぐ中川運河に沿う道に出ます。道路を左に100m程行くと西宮神社(金毘羅社)があります。この社は中川運河の鎮守とされ、ここにも築城石切場跡の碑があります。



中川運河にかかる小栗橋。向うは露橋

め2本南の旧道に入ります。曲がり角は名古屋が誇る鈴木バイオリンの工場です。左に曲り東に進むと古い集落です。中にハッとするような街並みに出会います。

少し広い道に出たら左に山王線に戻ります。東に鉄

道のガードを越え、その後は北側の歩道を行います。まっすぐな広い道は東に堀川の山王橋を渡ると熱田台地にかかります。今回はこの古渡の取付きまでとしておきましょう。バックすれば名鉄の山王駅、そのまま進めば地下鉄の東別院駅になります。

4 古代の道から中世の道へ

今回の鎌倉街道をさがす旅は、木下氏の古代道路説を追うことになりました。古代駅路は、30年ぐらい前から全国各地で遺跡が発掘されるようになるまで、広幅員で直線だったとはなかなか想像できませんでした。江戸時代の街道から考えると、それ以前の道はもっと細く曲っていたと考えがちだからです。

しかしそれは徳川幕府の軍事上の政策のためでした。古代の計画道路や、それを引き継ぐ中世の街道は、早馬や大軍の移動のため道は広くまっすぐが指向されたのでしょうか。鎌倉街道をさがす時も、このことは常に念頭に置かないといけないようです。

〈主な参考文献〉

- ①木下良：古代の交通制度と道路(所収：森・門脇編「旅の古代史」1999、大巧社)
- ②木下良編「古代を考える 古代道路」(1996、吉川弘文館)
- ③秋田源一「善行寺の石紋と徳佐川」(1993、自費)



月島町の街道跡と想定される道路(東→西)